

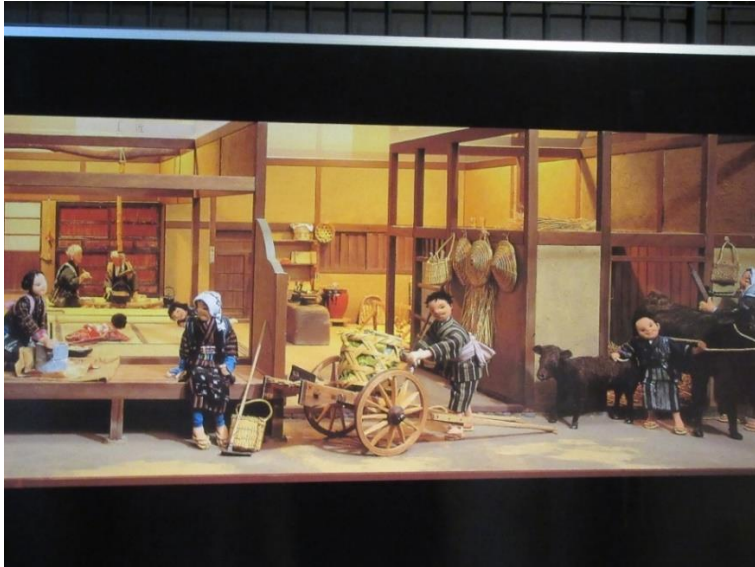
“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第6回「明治、但馬牛が農家に広まる」

「但馬牛は昔から“農宝”として、家族同様大切に育てられてきた」と言われています。但馬牛博物館に人形作家渡辺うめさんの作品の写真を展示していますが、まさにそんなシーンを切り取ったような作品です。



このような農家と牛の関係はいつ頃、どんなふうにできあがったのでしょうか？

魏志倭人伝に「其地無牛馬虎豹羊鵲」とあるように元々日本にはおらず、5世紀頃に朝鮮から渡来したと言われています。

朝来市にある5世紀頃の船宮古墳から日本最古の牛形埴輪が出土しています。但馬には早くに牛が渡来していますが、初めは王だけが持てる貴重な家畜だったのでしょう。

丹波市の梶原遺跡からは、犁（すき）が出土しています。この犁は遣唐使によってもたらされたものどいい、牛耕は奈良時代に伝来したと思われます。

平安、鎌倉時代は牛車を牽く車牛がスポットライトを浴び、『宇津保物語』には紀伊国の長者の家で、「牛どもに犁かけつつ、男ども緒持ちて働く」と書かれていると言います。この頃は貴族や大金持ちの家畜だったようです。

豊臣時代に牛市場ができ、広域流通するようになりました。

天王寺牛町の石橋孫右衛門家に伝わる『相牛秘伝』に「大城谷、大屋谷、八木谷の牛は農耕に使っても長持ちし、ごく上等だ」とあり、周助蔓の基になった牛にも「八木谷で毎年田を耕す良牛を見つけ、その娘牛を買い求めた」という説もあって、江戸時代には牛耕が普及していると思ってしまう。

しかし、但馬の市町史をみると、江戸時代後期で牛を飼っている農家は意外に少なく、全農家の1/5～1/4ほどにすぎず、年貢徴収の基礎として村の生産力を示す“村高”100石あたり5～6頭飼われている村が多く、牛耕が広く普及しているとは言い難いようです。

『但馬史』によると、幕末期の親牛1頭の資産評価額は通常銀500匁で、これを1850年頃の米価で換算すると5石6斗になります。当時富農に雇われて田畑の管理をする作男の給米が年1石5斗だったと言いますから、牛は大変高価な家畜でした。

江戸時代の蔓牛を作ったのが、富農や家畜商だったのは、こんな背景によるのでしょうか。

前号で、篠山、三田辺りの“入厩制度”を書きましたが、但馬でも“牛持ち”と言われる地主や富農、商家等の資産家が“牛小作”と言われる農家に雌牛を貸す習慣がありました。

“牛小作”は牛を飼って、農耕に使い、厩肥を利用しますが、子牛の売り上げは“牛持ち”の収入となります。“牛小作”にとっては牛の導入経費が要らず、商家の荷役というサイドビジネスもあったようで、“

牛持ち”の中には数百頭も所有する者もあり、1890年代までこうした習慣がありました。

明治の国策“富国強兵”の“富国”は、産業振興による経済力の向上です。農業でも畜力利用による生産力の向上を目標に農機具の輸入、犁など農具の改善、牛馬の増頭が図られ、明治以降に牛馬耕が普及したとする県は多いです。

兵庫県では1878年から牛の貸与制度が始まりました。県が牛を農家に預託する導入事業の原型で、翌年には養父市場村の民家を借りて貸与牛取扱所ができ、貸付事務や飼育指導を行いました。“貸付制度”により農家に子牛の販売収入が入り、子牛価格が上がったのも追い風になって牛が増えたようです。

1903年の牛飼育頭数は、城崎郡2,440頭、出石郡1,751頭、養父郡2,394頭、朝来郡1,793頭、美方郡3,112頭で、養父町史も「牛飼育の隆盛化は明治以降認められる」としていて、牛が但馬の農家で広く農耕に利用されたのは、耕運機が普及する1960年代までの80年余ということになります。

小出満二氏は『但馬牛産論』で、但馬は島根や因幡、播磨等と違い、昔から雄牛が極端に少なく、雌が多いのが特徴で、荷役利用は少なく、農耕利用は二毛作地で春耕5～20日、秋耕2～10日、春彼岸の頃の麦畦間中耕に数日で、年30日ほどに過ぎないことから、子牛販売目的が主体だったと推測しており、耕作を助ける家畜というより、現金収入源として農家経済を支える家畜だったように受け取れます。

また小出氏は、但馬人の牛に対する感情について「産業の資産というよりもむしろ愛玩動物と称すべきにあり」として、「牛の世話は10歳から15、16歳の子供たちの仕事で、彼らは真に牛を愛し、友とした」とも書いています。

このように但馬牛は江戸時代の終わりから明治期に農家に広く飼われるようになり、農家経済を支え、農耕の助けにもなる家畜として愛まれるようになったのでしょう。牛を愛しながら、農家経済を支える蔓牛を造ろうとした前田周助と通じるものがあるような気がします。